

バーナード・ウィリアムズ「内在的理由と外在的理由」

はじめに

本論文‘Internal and External Reasons’¹においてウィリアムズは、「A には ϕ する理由がある」²という言明(以下、理由言明と呼ぶ)の分析を行なっている。彼によれば、このような理由言明には大きく二つの解釈が成り立つ。一つは彼が内在的解釈と呼ぶもので、簡単に言うところの解釈によれば、「A には ϕ する理由がある」という言明は、A に ϕ する動機がある場合には真、ない場合には偽になる。たとえば「A には軍隊に入る理由がある」という言明は、A に軍隊に入る動機があるならば真、ないならば偽となる。彼はこの解釈が成り立つ理由言明を内在的理由言明と呼んでいる。もう一つの解釈は、「A には ϕ する理由がある」という言明の真偽は A に ϕ する動機のあるなしに依存しないというもので、彼はこれを外在的解釈と呼び、この解釈が成り立つ理由言明を外在的理由言明と呼んでいる。この場合、たとえ A に軍隊に入る動機がなかったとしても、「A には軍隊に入る理由がある」という言明が真になることがありうる。本論文にお

¹ Bernard Williams, ‘Internal and External Reasons’ from Stephen Darwall et. al., *Moral Discourse & Practice: Some Philosophical Approaches*, Oxford: Oxford University Press, 1997, 363-371. 初出は Ross Harrison (ed.), *Rational Action* (Cambridge University Press, 1980)。ウィリアムズの *Moral Luck* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981)にも収録されている。本文中の引用のページ数は *Moral Discourse & Practice* のものである。

²英語では‘A has a reason to ϕ .’ もしくは‘There is a reason for A to ϕ .’ ウィリアムズは前者の方が内在的解釈、後者の方が外在的解釈に結びつきやすいものの、両者ともにいずれの解釈もありうるかと述べている。

いて彼は洗練された形での内在的解釈を支持し、理由言明の外在的解釈は「誤りであるか、不整合であるか、あるいは何か別のものを誤解を招く仕方で表現している」(pp. 369-70)と結論している。以下では内在的解釈と外在的解釈についての彼の考察を順に見ていく。

なお、ウィリアムズが外在的解釈の検討の部分で断わっているように(pp. 366-7)、本論文における理由言明の分析は合理性一般にかかわるものであり、道徳性に限定されるものではない。また、本論文において彼は、「A には～する理由がある there is a reason for A to ...」という言明と「A は～すべきである A ought to ...」という言明を等しいものとしては見ておらず、ought の分析は行なわれていない³。

内在的理由

まず、ウィリアムズは内在的解釈のもっとも単純なモデルを提示する。これは、「A にφする理由があるのは、A がφすることによって満たされる欲求を持つ場合である」というものである。たとえば A がジントニックを飲みたいという欲求を持っているならば、「A にはジンとトニックを混ぜて飲む理由がある」という言明は真である。彼はこれをヒュームの立場を単純化したものとして、下位ヒュームモデル (the Sub-Humean model)と呼んでいる。

ウィリアムズはこのモデルは単純すぎるため、より洗練された内在的解釈を提示している。単純だというのは、このモデルには「理由」が含意する合理性

³ ought の分析は *Moral Luck* (op. cit.) の “‘Ought’ and Moral Obligation” で行なわれている。

rationality という要素が抜けているからである(どのような形で合理性が問題になるかは、以下で見る)。そこで、彼はより洗練された内在的解釈の特徴として、次の四つの条件を提示する。

- (i) 内在的な理由言明は、集合 **S**(subjective motivational set, 主観的な動機の集合) に適切な要素が不在の場合に、偽となる。
- (ii) 集合 **S** の要素である **D** は、(1)**D** の存在が誤った信念に依存しているか、あるいは(2) ϕ することが**D**の満足につながるという **A** の信念が誤っている場合は、**A** に理由を与えない。
- (iii)(a) **A** は自分についての内在的な理由言明を誤って信じることもある。
(b) **A** は自分についての真なる内在的な理由言明を知らないこともある。
- (iv) 内在的な理由言明は、熟慮すると (in deliberative reasoning) 見出されうる。

すでに見たように、「**A** には ϕ する理由がある」という内在的理由言明の真偽は、**A** に ϕ する適切な動機が存在するかどうか依存する。そこで、**A** の持つ動機の集合 **S** の中に ϕ する動機が存在しないならば、内在的理由言明は偽になる(i)。ところで、下位ヒュームモデルによれば、この集合 **S** に含まれる要素は欲求のみであり、しかもすべての欲求が行為の理由になりうるとされる。しかし、ウィリアムズによればこれは正しくない。というのは、ある欲求の存在が誤った信念に基づいている可能性があるからである。上の条件の(ii)と(iii)はこの点にかかわっている(欲求以外にもさまざまな要素が集合 **S** に含まれることについては、もう少しあとで述べる)。この点について、彼自身が出している有名

なジンとガソリン(gin and petrol)の例を用いて説明する。

今ある行為者がジントニックを作るためにジンとトニックを混ぜあわせようとしているが、彼がジンと信じている液体は実はガソリンであるとする。この場合、「彼には自分がジンと信じている液体とトニックを混ぜあわせて飲む理由がある」と言うべきだろうか。もし彼が実際にそう行為した場合、彼の行為を説明するさいにそう述べるのは一見もっともらしい。しかし、理由言明は合理性をも問題にすると考えられるから、彼の信念に誤りがある場合、そうする理由があったと述べることはやはり適切ではない。したがって、 ϕ したいという欲求の存在が誤った信念に基づいている場合や、 ϕ することによって欲求が満たされるという信念が誤っている場合は、こうした欲求は A に ϕ する理由を与えない(ii)。また、この事例のように、A は自分に ϕ する理由があると思っけていても実は(信念に誤りがあるために)そのような理由はなかったり、逆に、A が自分について当てはまる内在的理由言明を知らなかったりすることもありうる(iii)。

ウィリアムズは、A が自分について当てはまる内在的理由言明を知らない理由として、ある事実を知らない場合と、集合 S 内のある要素に自分で気付いていない場合を挙げている。前者は、A がある事実を知っていれば、欲求を満たすために ϕ する理由があることに気付いていた、という場合である。後者は、 ϕ することによって満たされる要素 D が集合 S 内に存在することが、よく考えてみるとわかるという場合である(iv)。彼は、この「よく考えてみると」(熟慮 deliberation)を合理性と結びつけて考えており、上と同じことを「 ϕ することが

D と合理的に結びついている場合」という風に表現している。またこの「よく考えてみるとわかる」というのも、単に欲求と行為のあいだの手段目的関係に気付くというだけではなく、集合 S 内のさまざまな要素をどのような順序で満足させるべきかとか、衝突する要素のいずれを満足させるべきかとか、楽しい夜にするにはどのような行為を組み合わせれば満足いくものになるか、といったことの発見や解決も含まれる。こうした熟慮の結果、内在的理由のある行為を発見したり、ある行為をするさらなる理由を見つける場合もあれば、また逆に、信念の誤りに気付いたり、ある行為の帰結について(たとえば相手の立場に立つことより)想像力を働かせたりした結果、ある行為をする理由を失なったりする場合もある。

このように、ウィリアムズは単純な下位ヒュームモデルを修正し、誤った信念の存在や熟慮による理由の発見といった事態を考慮に入れた内在的解釈を提示する。その特徴は一つには合理性(信念の正しさや熟慮)を重視するという点であり、また一つには行為者の動機の集合 S が固定しておらず、熟慮を通して要素が増えたり減ったりするという点である。さらに集合 S の要素についても、狭い意味での欲求だけでなく、一定の価値判断を下す傾向性や、感情的反応のパターン、個人的な忠誠、それにさまざまな(人生)計画などが含まれ、またそれらは必ずしも利己的なものである必要はないとされる。このように単純な下位ヒュームモデルを超えた内在的解釈を打ち出すことにより、彼は内在的解釈の立場を魅力的なものにしている。彼も認めているように(p. 369)、「熟慮」によっ

て何ができて何ができないのかというのは非常に曖昧である⁴。次に、外在的解釈についての彼の考察を見る。

外在的理由

代々軍人を輩出してきた一家において、軍隊に入隊する気がまったくない息子に対して彼の父親が「おまえには軍隊に入る理由がある」と言うとする。この場合、父親は息子の気持ちを知りつつも、「よく考えたら息子は軍隊に入る気になるだろう」と考えているかもしれない。だとすれば上の理由言明は内在的なものである。しかし、父親が「よく考えてもやはり息子は軍隊に入る気にはならないだろう」と考えつつそのような主張をしているとすれば、上の言明を

⁴ウィリアムズが最近書いたこの論文の *postscript* によれば、彼は内在的理由を「A が ϕ する理由を持つのは、A の主観的な動機の集合(S)から A が ϕ することに至る 健全な熟慮の道筋(a sound deliberative route) が存在する場合に限る」というふうに定式化することを好んでいる (ただし、これは A が ϕ する理由を持つための必要条件であり、彼はこれが十分条件であるかどうかは不問に付している)。「健全な」というのは、一つには上で見たジンとガソリンの例のように、誤った信念に基づいた推論を排除するということである。また彼は熟慮の一部として想像力の働きの余地も認めており、その意味で熟慮は必ずしも古典的な合理的な意思決定論のように演算によって結論に辿りつくものであるわけではない。彼によれば、これは熟慮が本質的にあいまいな働きであることを認めた現実的な説明である。さらに彼は、理性的な行為者の S に利他的な配慮やその他の道徳的な配慮が含まれることは決して否定しないが、すべての理性的な行為者の S に道徳的考慮や長期的な自愛の考慮が含まれているとは考えていないと述べている。これはつまり、すくなくとも一部の人々は、理性的に考えたとしても道徳的に行為したり、自分の長期的な利益に配慮して行為したりする理由を持たないということである。Bernard Williams, 'Postscript: Some Further Notes on Internal and External Reasons', in *Varieties of Practical Reasoning* (ed. by Elijah Millgram), Bradford Book (the MIT Press), 2001, pp. 91-97. 彼の 'Internal Reasons and the Obscurity of Blame' (in *Making Sense of Humanity*, Cambridge University Press, 1995) も参照せよ。

外在的なものと解釈しなければならないだろう。

ウィリアムズによれば、外在的解釈の大きな難点は、行為の説明ができないことである。たとえば上の息子が軍隊に実際に入隊した場合、父親が「息子には軍隊に入る理由があったから、入隊したのだ」と述べても、これでは息子の行為を説明できていない。なぜなら、行為の説明にはそのように行為した動機が含まれていなければならないのに、外在的解釈の立場では理由言明は行為する動機がなくても真になりうるからである。

そこで、外在的解釈の立場で行為の説明ができるように、ある特定の考慮が理由であると信じることによって動機が与えられると仮定する。こうすれば、たとえば上の父親は、息子が軍隊に入ったのは、よく考えたすえ、家族の伝統を尊重することが軍隊に入る理由になると彼が信じるようになったからだと言明することができる。この説明は一見すると「よく考えたら行為する理由があることがわかる」という内在的解釈とほとんど区別がつかないが、重要な違いは、内在的理由言明の場合は行為者の動機の集合 S 内に熟慮の結果なんらかの仕方で ϕ する動機となる要素が存在することが前提されているのに対し、外在的な理由言明の場合はそのような要素の存在は前提されていないということである。それゆえ、外在的理由言明は「行為者が合理的に熟慮すれば、彼がもともとどのような動機を持っていたとしても、 ϕ する動機を得るようになる」(p. 368)という主張と等しいか、すくなくともこの主張を含意することになる。しかし、ウィリアムズの考えでは、この主張は明らかに偽である。なぜなら、彼によれば、もともと ϕ する動機があったか、それを生み出すような別の動機があ

ったのではないかぎり、よく考えた結果ゆする動機を得るということはありえないからである。

このように、ウィリアムズは理由言明の外在的解釈は行為の説明のさいに必要な動機という要素を説明できないという理由から、外在的解釈を批判している。たしかに「よく考える」ことにより、今までなかった動機が新たに生じることもあるが、それはそれを生みだすきっかけとなる動機がある場合に限るのであり、外在的解釈の場合、いくら「よく考えて」も、元になる動機がなければ行為する動機は出てこないというのである。それゆえ、外在的解釈の立場から、「あなたは～する理由がある」と言ったり、それをしない人を「不合理だ」と言ったりするのは、「不合理」という言葉の誤用ないし濫用であり、単なる「はったりだ(bluff)」(p. 370)と彼は非難している⁵。

(こだまさとし 日本学術振興会特別研究員)

⁵外在主義の立場に立つ人は、規範的ないし正当化理由(normative or justifying reasons)と動機付けないし説明的理由(motivating or explaining reasons)の区別を持ち出すことによって、ウィリアムズの批判をかわそうとするかもしれない。すなわち、たしかに行為の理由を説明するさいには動機に言及する必要があるが、ある行為をすべきことを論じる(正当化する)さいには、動機には言及する必要はない、と主張するかもしれない。しかし、ウィリアムズは規範的理由と説明的理由には密接なつながりがあるとし、このような区別は役に立たないとしている。また、彼は理由言明が内在的でない仕方で行われる場合があることを認めているが、内在的立場の強みは、適切な仕方で行理由言明が用いられている場合とそうでない場合(「はったり」の場合)を区別できる点であり、真偽の基準が不明瞭な外在主義の立場ではこの区別ができないと述べている。‘Postscript: Some Further Notes on Internal and External Reasons’ (Secs. 3, 4), ‘Internal Reasons and the Obscurity of Blame’(pp. 38-40)を参照。